

官公庁・学術界からのメッセージ

ニューガラスフォーラムへの期待

東京工業大学
大学院理工学研究科 教授

矢野 哲司

ニューガラスフォーラムに伺ったのは、機関紙『NEW GLASS』編集委員の委員会へ出席したのが最初だったと思います。当時、専務でいらした上杉氏も毎回出席されており、大学の助手になってからあまり日の経っていない中で、委員のメンバーをはじめ、専務からもいろいろなことを伺った記憶があります。以来、ニューガラス科学技術研究会や、ニューガラス大学院など、NGF 主催のさまざまなプログラムに参画させていただき、それを契機にいろいろな分野の方と面識を持つ多くの機会をいただくことができたと感じています。

私にとって最も強い印象に残っているのは、やはり NEDO の省エネルギープログラムで採択・実施された『気中溶融法の開発』プロジェクトに参画させていただいたことでしょう。国のプログラムとして総計 8 年にもおよぶ長い期間にわたりプロジェクトは実施されました。フィージビリティを確認する最初の 3 年、具体的な省エネルギー効率の目標値を念頭に置いて実施された後の 5 年は、産官学の連携を強め、ガラス分野の将来を見据えて一体となって研究開発が進められた貴重で重要な年月であったと思います。産業の生産に直結する技術の開発への参画は、メンバーが共有すべき事柄はなにか、についてさまざまな意味で認識を新たにしてくれた 8 年間と言えるでしょう。その意味で、ニューガラスフォーラムが、異なる分野の人たちをつなげるコーディネーターとしての役割をもっとも発揮させたプロジェクトの一つではなかったのではないかと思います。得られた成果の波及効果は、時節や世の中の経済的時流に依るところが多いため時を待つ必要がありますが、日本独自のユニークな技術として世界のガラス分野に注目されたことは間違いありませんし、いまもなお関心を持たれ注視されていることは間違いなく、ニューガラスフォーラムの果たした役割は大きいものといえます。

いま、科学技術の戦略図（ロードマップ）をみると、素材の開発に関わるキーワードを探することは難しい状況にあります。重要でなくなったというわけではないのはもちろんですが、あらわに表に現れない状況に至っていることは間違いのないでしょう。新しいイノ

バージョンが起き、ガラス素材が改めて表に出てくる機会を待つ時期なのかもしれません。ニーズ・シーズは意外なところから顔を出すかもしれません。グローバルな社会の中で注目を集め続けることは非常に難しいことですが、創造性と新たな価値を生み出す試みは常に必要であり、様々な価値観を結びつけることがニューグラスフォーラムの果たす重要な役割の一つではないかと感じます。ますますの発展とガラス産業界への貢献を期待しております。